

蟹に化した人間たち (1)

蛸 島 直

はじめに

人間が死後、他の動植物に姿を変えたという伝承は少なくない。有名なところでは、平家蟹^{へいけがに}、お菊虫^{きく}、実盛虫^{さねもり}、寺つつき^{ていかずら}、定家葛^{かもんぼな}、掃部花^{れんげそう}（蓮華草）などが挙げられる。こうした伝承群には、おそらくは日本人の死生観や民俗生物学的な知識が投影され、日本文化を理解する上で重要な素材であると考えられる。しかしながら、その研究に際しては、少なくとも3つの課題があろう。第一に、これらの伝承上の生物を生物学上のいずれの種に同定あるいは比定できるか、またはできないかという課題である。第二に、いかなる人物がどのような背景で何故その生物に結び付けられたのかという問題である。第三には、他の動植物への変化・変態・再生など、説明のされ方の多様性に留意すべきことである。すなわち、その伝承が、種（生物学上の「種」に一致するとは限らない）の誕生自体を説明するのか、既存の種の一つの誕生を説くのか、あるいは既存の種の一つの姿を借りたに過ぎないのか、などといった相違に注目すべきことである。

人間が蟹に再生・化生したとされる伝承は特に有名である。中でも平家蟹の名は最も知られているが、他にも、清経（清常）蟹・武文蟹・島村蟹・長田蟹・治部少輔蟹など、歴史上の人物の名を冠し、その生まれ変わりなどと伝えられる蟹の名称が存在する。1185年の壇ノ浦の合戦に破れた平知盛^{たいらのとももり}ら平家の一門は「平家蟹」に、1190年に源頼朝の命で処刑されたという長田忠致^{おさだただむね}・長田景致^{かげむね}父子は「長田蟹」に化し、1331年に大物浦で自害した秦武文^{だいのつうら}は「武文蟹」に、1531年に同じく大物で入水した島村貴則^{しまむらたかのり}は「島村蟹」に化したとされる。『大和本草』（1709年）や『物類称呼』（1775年）はこれらを「鬼蟹」と呼び、同種の蟹の方言であるとしている。前者はさらに豊前・長門での「キヨツネガニ」という別称も取めている。これは、1183年に豊前柳が浦に若くして入水した平清経^{たいらのきよつね}の名に基づくものである。こうした同種異名説は、少なからぬ研究者や国語辞典にも踏襲されている。ちなみに生物学者でもあった南方熊楠も上記の蟹をみな「平家蟹」と呼んでいる [南方 1913 (1973) : 47-60]。しかしながら、そこには疑問が残る。錦絵等に描かれたそれらの姿は多様であるし、人間の顔のように見える甲羅を持つ蟹は少なくないからである。



写真1 ヘイケガニ
(写真提供 下関市立しものせき水族館)

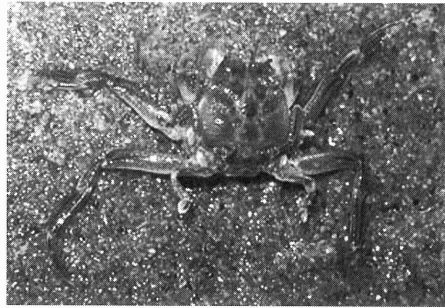


写真2 サメハダヘイケガニ
(写真提供 下関市立しものせき水族館)

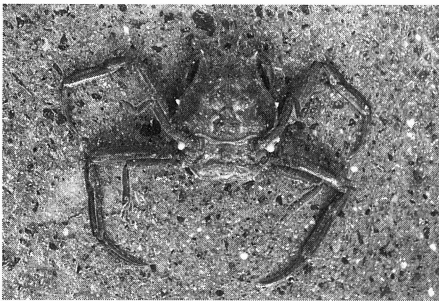


写真3 キメンガニ
(写真提供 下関市立しものせき水族館)

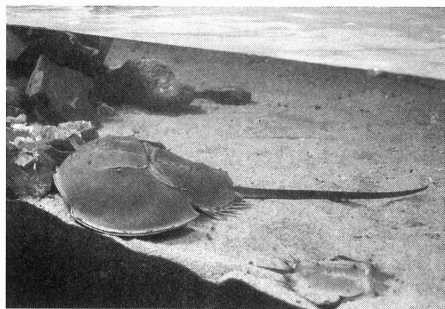


写真4 カブトガニ
(下関市立しものせき水族館にて筆者撮影)

以下、人間が蟹(カブトガニを含める)に化成したという伝承について、辞典類、本草書、随筆、図譜など過去の文献における記述を振り返りながら、上記の3課題(同定あるいは比定の問題、伝承の成立背景、説明のされ方)に沿って、蟹への化成に関する伝承を再考してみたいが、資料と関連する伝承が多量かつ多岐にわたるので、今回は、第一の課題、すなわち同定、比定の問題、それもその中途までに留め、他については別稿に譲りたいと考える。

なお、本稿は、諸文献からの引用回数が多く、注が煩雑になることを防ぐために、文献の出典は本文中に[]で示し、また辞典類については次頁に示す[表1]の情報により検索可能と考え、個々の引用箇所での編著者名や頁の表記を省略することにした。

1 辞典類の記載

「平家蟹」はこれまでに編まれた多数の国語辞典に、同名の項がほぼ決まって立項されている蟹である。最初に『広辞苑』の最新版である第六版(2008年)の「平家蟹」の項を見てみよう。そこには「へいけがに【平家蟹】ヘイケガニ科のカニ。甲長二セ

表 1

辞典名	編著者名	刊行年	出版者名	立項された蟹(*:挿絵有り)	同定
1 漢英対象 いろいろは辞典	高橋五郎	1888	長尾景昶	へいけがに, しまむらがに	へいけがに [Dorippe callida] = おにがに = しまむらがに [Dorippe callida]
2 日本辞書 言海	大槻文彦	1889- 1891	大槻文彦	へいけがに, たけぶんがに	へいけがに = おにがに = きめんがに = たけぶんがに
3 日本大辞書	山田武太郎	1893	日本大辞書 発行所	へいけがに, しまむらがに, たけぶんがに	へいけがに = きめんがに = しまむらがに = たけぶんがに
4 日本大辞林	物集高見	1894	清水卯三郎	へいけがに, *たけぶんがに	へいけがに = しまむらがに = たけぶんがに = *かぶとがにの一種 (矛盾あり)
5 帝国大辞典	藤井乙男・草 野清民	1896	三省堂書店	へいけがに, しまむらがに, たけぶんがに	へいけがに = きめんがに = しまむらがに = たけぶんがに
6 ことばの泉	落合直文	1898	大倉書店	へいけがに, たけぶんがに	へいけがに = きめんがに = たけぶんがに
7 辞林	金沢庄三郎	1907	三省堂書店	へいけがに, たけぶんがに	へいけがに = きめんがに = たけぶんがに
8 大辞典	山田美沙	1912	三省堂書店	へいけがに, しまむらがに, たけぶんがに	へいけがに = きめんがに = しまむらがに = たけぶんがに
9 大日本国語 辞典	上田萬年・松 井簡治	1915- 1919	富山房	へいけがに, おにがに, しまむらがに, たけぶん がに	へいけがに = おにがに
10 日本大辞典 改修言泉	落合直文著・ 芳賀矢一	1921- 1928	大倉書店	*へいけがに, おにがに, しまむらがに, たけぶ んがに	へいけがに = おにがに = きめんがに = しまむらがに = たけぶんがに
11 日本辞書 言海	大槻文彦	1932- 1937	富山房	へいけがに, たけぶんがに	へいけがに = きめんがに = たけぶんがに
12 大言海	大槻文彦	1932- 1937	富山房	へいけがに, しまむらがに, たけぶんがに	へいけがに = おにがに = きめんがに = しまむらがに = たけぶんがに
13 大辞典	下中彌三郎	1935	平凡社	*へいけがに, おさだがに, おにがに, きめんが に, きよつねがに, しまむらがに, たけぶんがに	へいけがに [Dorippe japonica von Siebold] = おさだがに = おにがに = きめんがに = きよつねがに = しまむらがに = たけぶんがに [サメハダヘイケケガニ]
14 広辞苑	新村出	1955	岩波書店	*へいけがに, *きめんがに, たけぶんがに	へいけがに [ヘイケケガニ] = たけぶんがに = きめんがに [キメンガニ]
15 日本国語大 辞典	日本大辞典刊 行会	1973- 1975	小学館	へいけがに, おさだがに, おにがに, きめんがに, きよつねがに, しまむらがに, たけぶんがに	へいけがに = おさだがに = おにがに = きよつねがに = しまむらがに = たけぶんがに = きめんがに = きめんがに [キメンガニ]
16 角川国語大 辞典	時枝誠記・吉 田精一	1982	角川書店	*へいけがに, きめんがに, たけぶんがに	へいけがに = たけぶんがに / へいけがに = きめんがに
17 国語大辞典 言泉	尚学図書編	1986	小学館	へいけがに, きめんがに	へいけがに = きめんがに
18 大辞林	松村明	1988	三省堂	*へいけがに, おにがに, きめんがに, たけぶ んがに	へいけがに = おにがに = たけぶんがに = きめんがに
19 大辞泉	大辞泉編集部	1995	小学館	*へいけがに, きめんがに, たけぶんがに	へいけがに = おにがに = たけぶんがに
20 広辞苑 (第六版)	新村出編	2008	岩波書店	*へいけがに, *きめんがに, たけぶんがに	へいけがに = たけぶんがに = きめんがに

ンチメートル，左右の歩脚を伸ばすと約一五センチメートル。後方の二対の脚が短く，これで貝殻を背負って身を隠す。駿河湾以南に分布。特に瀬戸内海に多く，甲の表面に人面を思わせる隆起模様があるので，平家一族の怨霊の化したものと伝える。武文蟹」とあり，挿絵も添えられている〔新村出編 2008〕。ここでは，「平家蟹」をヘイケガニ科のヘイケガニに特定しているかのようなようであるが，実際『広辞苑』第一版（1955年）には「和名ヘイケガニ」と明記されていた。さらに第一版から第六版に至るまで，異名として武文蟹があること，そして「平家一族の怨霊の化したもの」との伝承を紹介している。なお，『広辞苑』には別に「鬼面蟹」の項が設けられ，第六版は「きめんがに【鬼面蟹】ヘイケガニ科のカニ。ヘイケガニに似るが，甲の背面の人面状の刻印上に突起があるため鬼面のように見える。甲幅三～五センチメートル。東京湾以南の沿岸にすむ」と記している〔同〕。さらに第一版は「和名キメンガニ」と付記し，種としてのキメンガニ（以前は *Dorippe frasco*，現在は *Dorippe sinica*）を特定しているが，実際の日本語としての「鬼面蟹」は，鬼のような面を有した蟹の総称となることもあり，キメンガニ一種に限定されるものではない。『広辞苑』は第二版（1969年）から「和名ヘイケガニ」「和名キメンガニ」を削除しているが，甲長・甲幅などの記載は継承されている。地方名を含む日本語としての名称と標準和名とは区別されるべきで，両者が一致するのはむしろ稀と考えるべきであろう。「平家蟹」「鬼面蟹」ともに一定名称の蟹を特定種に同定してしまうこと，また「平家蟹」と「武文蟹」を不用意に同一とすることには問題がある。こうした欠陥は『広辞苑』に限らず，ほとんどすべての国語辞典に共通して認められるようである。

筆者は，明治21年（1888）刊行の『漢英対象いろは辞典』以降，2008年の『広辞苑』（第六版）に至る計20点の国語辞典における「へいけがに」等の記載を確認した。具体的には「へいけがに」「おさだがに（をさだがに）」「おにがに」「きめんがに」「きよつねがに」「しまむらがに」「たけぶんがに」の7名称についてそれぞれの項目の有無を確認し，それらのうち，同物異名の関係にあるもの，すなわち何と何が同一とみなされるのか，また，生物学上の特定の種との同定・特定がなされていれば，それにも注意した。これらを整理したのが〔表1〕である。各行とも，(1)辞典名，(2)編著者名，(3)刊行年，(4)出版者（社）名に続いて，(5)上記の蟹のうち各辞典が立項する蟹の名称を列挙した。全ての辞典が「へいけがに」を立項しているので，これを先頭に，他は五十音順で配置した。続いて，(6)同一とされる蟹を等号（=）で結び，「似る」と表記されたものは≒で結んだ。さらに特定種との同定・特定がなされているものは〔 〕内にその学名あるいは標準和名を記すことにした。各辞典の文字表記の仕方は様々ではないので，平仮名表記に統一し，また，標準和名を指すと考えられる名称は片仮名表記に統一した。

(6)の等号の付し方であるが，同一辞典の「A」の項目に「Bと同じ」あるいは「Bの異名」とあれば「A=B」とし，「B」の項目に「Cと同じ」あるいは「Cの異名」と

あれば、「B=C」となると同時に、「A=B」であったので「A=B=C」と表記している。(6)に挙げる名称数が(5)のそれを上回る場合が多いが、それは「平家蟹」の項に「鬼蟹また島村蟹に同じ」とありながら「鬼蟹」が立項されていないことなどによるものである。

[表1]に示した20点の国語辞典は、いずれも複数の蟹の名称が同物を指すと説明している。先述の通り、「へいけがに」はすべての辞典が立項し、しかも他の名称の説明として「へいけがにの異名」という表現が目立つ。立項数が最も多いのは『大辞典』(No. 13)と『日本国語大辞典』(No. 15)の7項目である。項目名もすべて一致することは興味深い。ただし、後者は、「きめんがに」を和名キメンガニに同定し、他の6名称を同物に対する異名としている。これに対し、『大辞典』(No. 13)は「きめんがに」も他と同物とするので、同物に対する異名は7名称、さらにうち2名称に学名と和名と判断される名称を与えているので都合9名称が与えられている。

ここで、『大辞典』(1935年 平凡社)の記載を詳しくみてみよう。①「平家蟹」②「長田蟹」③「鬼蟹」④「鬼面蟹」⑤「清経蟹」⑥「島村蟹」⑦「武文蟹」の7項目を立項しているが、①「平家蟹」の項では学名 *Dorippa japonica von Siebold* (現在は *Heikeopsis japonica*) すなわち標準和名へいけがにに同定したうえで「異名、鬼蟹・武文蟹・島村蟹」と記載している。②「長田蟹」の項は「鬼蟹。平家蟹」、さらに③「鬼蟹」④「鬼面蟹」⑤「清経蟹」の項はそれぞれ「平家蟹の異名」と記され、⑥「島村蟹」の項では「方言。鬼蟹。撰津(物類称呼)」、⑦「武文蟹」の項ではなんと「鮫肌平家蟹(さめはだへいけがに)の異名」と記している。最後の「鮫肌平家蟹」は、薄気味悪く、気になる表記だが、伝説や物語に登場する名称でも地方名でもない。「顔面が粒々でおおわれ、さめ肌」をしている[酒井 1980: 40]のために命名された標準和名サメガダへいけがにであり、現在の学名は *Paradorippe granulata* となる。

すなわち個々の項目内では、それぞれ①「へいけがに [*Dorippa japonica von Siebold*] =おにがに=たけぶんがに=しまむらがに」、②「おさだがに=おにがに=へいけがに」、③「おにがに=へいけがに」、④「きめんがに=へいけがに」、⑤「きよつねがに=へいけがに」、⑥「しまむらがに=おにがに」、⑦「たけぶんがに=サメハダへいけがに」と等号が結ばれる。そして全体的には、「へいけがに=和名へいけがに=おさだがに=おにがに=きめんがに=きよつねがに=しまむらがに=たけぶんがに=和名サメハダへいけがに」と formulate されることになる。ここに大きな矛盾が生じてしまう。7名称を同物といいながら、うち2名称に、異なる和名(学名)を与えている。結果的に生物学上の別種を同種とみなすことになってしまうのである。項目間の照合に見落としがあったということであろうか。

ところで、「生物学上の別種を同種とみなすこと」はいつの時代の誰にでも起こりうることである。とくに近縁のへいけがにとサメハダへいけがにを見分けるのは容易では

なく、和名や学名が与えられる以前に両者が果たして名称上で区別されていたのかは疑問である。民俗生物学は西洋近代科学としての生物学とは異なって当然である。国語辞典は、そうした点にもう少し注意を払うべきであろう。誤った同定ばかりでなく無理な同定も避けてほしいものである。

同一辞典内の矛盾はまだよとして、同一項目内で自己矛盾を起こしている辞典もある。『日本大辞林』(No. 4: 1894年)の「へいけがに」の項目には「たけぶんがにを見るべし」とあり、「たけぶんがに」の項目は、ヘイケガニと思われる挿絵入りで「武文蟹。かぶとがにの一種にて、ちひさきものなり。(略)また、摂津の尼崎にて、島村蟹と呼ぶは、享祿四年、細川氏の家臣に島村某といふが戦死せしよりの事にて、讃岐の八島にて、平家蟹といふも、平家の人の霊の化して成れるなりといふ。みなおなじころばへなり」と記している。ここでは「武文蟹」「島村蟹」「平家蟹」の3名称が同物であるのかどうかは明記されていない。あるいは無理を侵していないと評価すべきかも知れない。しかしながら、「武文蟹」に付された挿絵は、甲羅に人面の見える十脚の蟹であり、ヘイケガニのようである。念のために同辞典の「かぶとがに」の項目を見ると、明らかにカブトガニと思われる挿絵が付されている。これこそは無理の極みといえよう。

平家蟹の仲間はいかにしてカブトガニに結びついたのであろうか。『日本国語大辞典』(No. 15: 1975年)の「たけぶんがに」の項は「へいけがに(平家蟹)の異名」と記すとともに、「武文蟹者蟹也」という『本朝食鑑』の記載、また『和漢三才図会』の「鬼蟹(タケフンカニ しまむらがに) 俗云武文蟹」という記載を紹介している。

2 古文献の記載

『本朝食鑑』：武文蟹＝カブトガニ

ここで、人見必大著、元祿8年(1695)刊の『本朝食鑑』を見てみよう。同書は、「蟹(かぶとがに)を「蟹」とは同レベルの別グループとして記載している。「甲蟹」^{かぶと}とも表記し、「甲の字は、俗に兜と読む。蟹の殻が兜のようなので、こう名づけるのである」と語源を説いている。形状については「尖頭の兜のようで、広さは一尺余(略)十二足は蟹の足に似て(略)遊行するときは雌が常に雄を背負っている(略)雄は小さく、雌は大きい」と記すが、それは実際のカブトガニの生態に近いものといえよう。『本朝食鑑』は当然のことながら、食用に言及し、「我が国では、これは食用としない。漁人もこれを採らず、^{うむまう}宇牟幾宇と呼び、あるいは武文蟹と称している。元弘の乱(正慶二年、または元弘三年)にあって、^{もりなが}尊良親王の家僕^{はたのたけふん}秦武文が兵庫の湊で死んだが、その霊が甲蟹と化したという。それで、土地の人は現在に至るまで、^{いた}憐れみ感んで、これを採らないのである。^{みんかん}俚俗の^{あやま}誕り伝えることは、このように甚だ^{つたな}怯くばかげたことではある」と記している[島田 1981: 39-40]。

兵庫の湊を起点にした「武文蟹＝カブトガニ」の伝承がここに明記されているのであ

る。カブトガニの棲息域の問題が気になるが、かつては大阪湾にもいたといわれているという [伊藤富夫 1991: 16]。従って、現在の棲息域を根拠に「武文蟹＝カブトガニは間違いであり、武文蟹＝平家蟹なのだ」という主張は慎重さを欠くものといえよう。われわれは同物異名 (synonym) に注意を払うだけでなく、同名異物 (homonym) の可能性にも留意しなくてはならない。武文蟹と呼ばれる生物が複数存在するというのである。『日本大辞林』(1894年)は、同名異物すなわち複数の伝承が存在することを付記さえすれば問題はなかったともいえよう。

『節用集』

国語辞典の大先輩である『節用集』には、すでに同物異名についての記載がある。『書言字考節用集』は榎島昭武の編集により元禄11年(1698)に成立したとされるが [中田・小林 2006: 自序]、その第五冊(肢体・気形)には、すでに「へいけがに」「しまむらがに」「たけぶんがに」の3項目がある。そして「平家蟹」の項目には「へいけがに 坂西ノ土俗ノ呼ぶ所一武文島村等地ニ因テ名ヲ異ニス蓋シ各々一種也」と記されている [同: 110]。すなわち、「へいけがに＝しまむらがに＝たけぶんがに」という等式が成り立つのである。もちろん「蓋シ」の一語は見逃せず、慎重かつ良心的な姿勢といえよう。しかしながら、後の国語辞典は総じて断定口調となるのである。辞典ゆえの文字数の節約のためでもあろうか。

『物類称呼』

『物類称呼』は越谷吾山により安永4年(1775)に成立した方言辞典である。その巻二「動物」には「鬼蟹」の見出しのもと「をにがに○摂津にて・嶋むらがにといふ。兵庫及播州にて・武文かにと云。讃州にて・平家蟹と云。加賀越前にて・長田かにと云。これ元弘の乱に秦武文、摂州兵庫の海に死す。享禄四年細川高國と三好と摂州に戦ふ。細川の家臣島村何某敵二人を挟んで尼崎浦に没す。故にこれ等の説を後人附会する所也といふ」と記載している [京都大学文学部国語学国文学研究室編 1973: 32]。ここでは、「へいけがに＝おにがに＝おさだがに＝しまむらがに＝たけぶんがに」という同物5名関係が示される。

『大和本草』

生物の扱いに関してより慎重であろうと期待されるのが本草書である。貝原益軒編纂、宝永6年(1709)成立の『大和本草』巻之十四(介類)には「鬼蟹」の項があり、「人ノ口鼻耳目ノ形ソナハレリ異物ナリ和俗称スル名諸州ニテカハル攝州ニテシマムラガニ又武文ガニト云豊前長門ニテ。キヨツネガニ平家ガニト云皆一物ナリ一説武文蟹ハ鬣魚也ト云ハ未ダ何レカ是ナルヲ知ラズ」と記している [矢野宗幹他校註 1983: 192]。すなわち、「へいけがに＝おにがに＝しまむらがに＝たけぶんがに＝きよつねがに」となる。後の『物類称呼』は上記「きよつねがに」を「おさだがに」に差し替えた形になっている。また「一説武文蟹ハ鬣魚也」が気になるが、「鬣魚」は中国語でカブトガ

ニを意味している。

さらに、『大和本草附録』卷之二（介類）には「島村蟹」の項目が設けられ、次のように記されている。

鬼蟹也享祿四年備前ノ浦上掃部ノ助村雲。細川右京大夫晴元ト攝津ニ於テ合戦シ尼崎ニ於テ打負ケ自殺ス浦上ガ臣島村彈正左衛門貴則敵ノ強兵兩人ヲ左右ノ脇ニハサミ水ニ入テ共ニ死ス尼崎ノアタリ野里川ト云所ナリ其ノ靈蟹ト成シトテ島村蟹ト云怒レル人ノ面ノゴトシー説ニ細川高國カ臣ト云ハ誤ナリト云此蟹ハモロコシノ書ニノセタリ鬼蟹ト云然ルヲ近世ノ俗人アヤマリテ人ノ靈魂トス鬼蟹ハ昔ヨリアリ蟹ノ面鬼ノ如シ」と記される。 [同：342]

「しまむらがに＝（中国の）鬼蟹」だということである。貝原益軒は、日本の伝説に冷ややかな一方、「モロコシノ書」を盲信しているようである。中国の「鬼蟹」と、地方名を含む日本語の「おにがに」が果たして一致するのか疑問である。

『和漢三才図会』

『大和本草』にやや遅れ、正徳2年（1712）に寺島良安編『和漢三才図会』が成立する。その巻第四十六：介甲部には「蟹（かぶとがに）」に並んで「鬼蟹」の項がある。それぞれカブトガニとヘイケガニと思われる挿絵も添えられている。「鬼蟹」には右に「たけふながに」「しまむらがに」、左に「クイヘ。ウ」と振り、「俗ニ武文蟹、其小キ者ヲ島村蟹ト名ク、本綱〔本草綱目：筆者注〕ニ云ウ、^{カブトガニ}蟹ノ小キ者ヲ鬼蟹ト名ク、之ヲ食セバ人ヲ害ス」と記している〔寺島良安 1715〕。著者はさらに「思うに、鬼蟹は蟹の小さいものであるが、鬼蟹の中にもまた大小がある」と説明している〔島田他 1987：65〕。大きさの順は、カブトガニ＞武文蟹＞島村蟹ということになる。因みに「蟹（かぶとがに）」の項では「九州の海中に蟹がいる。状は兜蓋のようである。また鬼面に似ているので人は恐れる」とある〔同頁〕。著者は、カブトガニとヘイケガニと思われる挿絵を並べながら、前者を小型にしたのが後者だということである。ここに大きな矛盾が生ずることになるが、それは上記『日本大辞林』（1894年）の「たけふながに」の項に見た矛盾と同一である。出典は明記されないが、同辞典の記載は明らかに『和漢三才図会』に依拠している。典拠から矛盾までも踏襲してしまったのであろう。

『和漢三才図会』の矛盾はいかにして生じたのあろうか。カブトガニに関する文献上の記載を丹念に検証した伊藤大吾・伊藤剛史によれば、『本草綱目』の「鬼蟹」は南方にいる小型のカブトガニを指し、マルオカブトガニである可能性が高いという。そして、『和漢三才図会』が「日本にいない『鬼蟹』を、名前の似ている『鬼蟹』すなわちヘイケガニに当てた為、ヘイケガニがカブトガニの小型なものあるいは子供という考えになったと思われます」と指摘している〔伊藤・伊藤 2006：15-16〕。なるほどこれで得心できそうである。しかしながら、先述のように、『本朝食鑑』が記す「武文蟹＝カブトガニ」の伝承もまた誤記・誤伝とはいいたくないことを再確認しておきたい。

『和漢三才図会』はさらに次のように記述している。

所在地によって、好事家はそれぞれ勇士、戦死者の名にこじつけ、その霊が化したものであるという。元弘の乱のとき、秦武文は摂州の兵庫の海で戦死した。それで兵庫や播磨の明石の浦の鬼蟹を俗に武文蟹という。大きさは一尺に近く、蟹は赤色で白紋がある。享禄四年、細川高国は三好氏と摂陽で戦った。細川の家臣の島村何某というものが、そのとき敵二人を脇に抱き尼崎の水中に没した。それで尼崎の浦では小鬼蟹を俗に島村蟹という。大きさは一、二寸で円く腹の文様は鬼面に似ている。讃州の八島の浦から出るものを平家蟹といい、賀・越の海に出るものを長田蟹という。いずれも後人がこじつけた名前である。 [島田他 1987 : 65-66]

以上を整理すると、「カブトガニ>武文蟹>島村蟹=平家蟹=長田蟹」とうことになり、武文蟹と島村蟹の大きさはそれぞれ「一尺近く」と「一、二寸」であり、最大で10倍近く異なることになる。ところが、『本朝食鑑』によれば「島村蟹」はそんなに小さくはないという。

嶋村蟹＝ガザミ：再び『本朝食鑑』

『本朝食鑑』(1695年)は、「蟹」の項目下で「嶋村蟹」と「武文蟹」について記述している。前者については、「近時、摂州の尼崎・天王寺の前の海浜で大蟹が採れるという。腹の文が人面のようであって、嶋村蟹と呼ぶ。後奈良帝の享禄四年に、細川高国が三好氏(海雲元長)と尼崎・天王寺の辺で戦って敗死した折、高国の党であった嶋村某(高則)は、膂力人に勝れており、敵二人を脇に挟んで水中に没した。その霊が蟹に化したのを、土地の人は嶋村蟹と名づけたものである。この蟹は蛸蚌の類である」と記される [島田 1981 : 25]。

[表1]に示したように、多くの辞典は、「しまむらがに=へいけがに」と記しているが、しまむらがにの正体を、ワタリガニ科の蛸蚌(かざめ:ガザミ)とする記述は希少かつ重要である。「大蟹」とあるが、へいけがには甲長2cm前後、脚を延ばしても15cm程度であり、けっして「大蟹」ではない。一方、ガザミは大阪湾から瀬戸内海にかけては最大の蟹であろう。さらに、「腹の文が人面のよう」というのもへいけがにの仲間に限らない。ガザミの甲羅もまた人面に見えなくもない。

歌川芳員が『本朝名将鑑 嶋村弾正高則』(1858年頃)に描いた「嶋村蟹」は甲が左右に突き出しました遊泳脚を持ち、明らかにガザミ(ワタリガニ)である。ガザミは鉗脚(ハサミ脚)が長く強靱で「膂力」が目立つ。そこに敵兵二人を左右に差し挟むという嶋村貴則のイメージが重なるともいえよう。

『狗張子』

『本朝食鑑』とほぼ同時期の元禄5年(1692)に浅井了意による仮名草子『狗張子』が刊行され、多数の怪奇譚が収められている。その第一巻に「嶋村蟹」の話が記載されている。「細川高国の家臣、嶋村左馬助は、武篇を、心にかけてし者なり、わづかなる、あやまちありて、殺されたり、亡魂、すでに蟹となり、摂州尼が崎に、おほく生出たり、

世に嶋村がにと名づく」という。気になるのは大きさであるが、「余所のかによりハ。ちいさくして」とある。さらに「おもてのかたに、皴おほくミゆ、されハにや、顔のしわみたる人を、しまむらがにのやうに、と、いへるは、此事なりとかや。昔、平氏の一門、長門国、壇の浦にして、海にしづみし、その亡魂、ことごとく蟹となりて、長門国、赤間か関にあつまり、今の世までも、おほく有けり、と、聞つやへし」と記している。「へいけがに」という名称は記載されていないが、それに相当する蟹の話題につなげている点や「皴おほくミゆ」といった表現から、ここでいう「嶋村蟹」がヘイケガニ科の蟹である可能性は高く、少なくともそのように描かれているといえよう [浅井 1692 : 44-45]。

『摂陽群談』

ここで、もう少し島村蟹の同定・比定あるいは描かれ方に注意してみよう。後に取り上げる1645年刊行の『毛吹草』は「摂津」名物の一つに「野里川ノザトニ嶋村蟹シマムラガニ」を挙げている [竹内若 2000 (1943) : 164]。

『摂陽群談』(1698-1701年)は岡田溪志編纂による摂津国の地誌である。その「巻第九 城郭の部」には「島村左馬助戦場」の項目がある。それは西成郡の「中津川を指せり。享禄年中の戦場、島村敵二人を両脇に挟んで、河底に沈没す。此川岸の蟹の甲、皆鬼面を生ず。是則左馬助が勢ひ也とて、世に島村蟹と云伝へり(略)左馬助は、細川高国家人也。一説秦武文が怨念とも云へり。因て一名武文蟹と称するものは、名物門に比す」とある [岡田溪志 1969 : 186]。『毛吹草』等が記載する「野里川」とは「野里村の渡」を云い、これらの川筋の総てが中津川になるという [同 : 599]。また『摂陽群談』「巻第十六 名物土産の部」には「島村蟹」の項目があり、西成郡「野里村の川面に多し、此蟹の甲人の怒る面あり、細川高国家人島村左馬助、享禄年中、此川面に於いて戦死、其怨念を留ると云ひ、或は正六位上兼右近衛府生秦武文、亡魂を以って武文蟹とも云へり。川辺郡尼崎の浦辺にもあり、蟹カブトガニとするもの歟」と記している [同 : 479]

武文蟹=カブトガニ説が再び現れるが、島村蟹の場合、その同定・比定あるいは描かれ方は、ヘイケガニ科の蟹とガザミに加え、淡水性とはいわないまでも川に目立つ蟹という第三の同名異物が語られているようである。

とはいえ、[表1]に見るように明治以降の国語辞典は、島村蟹がガザミであるとも川の蟹だとも記していない。むしろ、多くの名称を「平家蟹」に一元化しようという姿勢が感じ取れるようである。比較や比定・同定の起点は、多くの場合「平家蟹」にある。あるいは「平家蟹」が終点となる。

ここで、他の文献における「平家蟹」についての記載を基本的に年代順に提示していきたい。

『塵塚物語』

『塵塚物語』は著者「藤某」とあり不詳、天文21年(1552)に成立したとされるが疑

問視もされている。同書巻二「大相国良光公御作文の事」には「平家かに」が登場するが、管見では、「平家かに」なる名称や人間が蟹に化生したという記述が認められる最初の記録のようである。そこでは、足利義満（1358-1408）が長門の阿弥陀寺（現在の赤間神宮）にて「平家かに」の献上を受けたと記されている。著者は、義満が仏教に帰依し、寺塔を建立し、情愛深い性格であったことを強調した後、次のように記している。

一とせ西国御下向の折ふし、長門の国にあみた寺へ御参詣あり其時院主申ていはく此所に平氏亡卒の靈蟹と化生して此のうみに住候これこれ御上覧に入奉らんとて、かの平家かにを一ツ進上しけれはよしみつ公つづく御らんして壽永元暦のむかしのあはれ御心にいたましくおぼして追悼の御作文をあそはしける。
[近藤編 1983 : 33]

義満のその追悼文は「嗚呼悲哉、三かいるてんのしゆらの業ハ 跋提河のなかれにおとされて、苦海のなみに志づみかかる蟹のすかたと化生せしもの歎可憐々々」と始まり[同 : 33]、「官軍此蟹と化生する」また「八苦のうみに志つみぼんのふの波瀾にたたよひて萬卒のこんはく天源にかへる事あたはず終に水底にるてんしてよる所なきままに虫に解して此かにとされるもの歎」[同 : 34]と記されている。

「化生」「三界流転」、釈迦入滅の地を流れる「跋提河」、苦界にかけた「苦海」など仏教用語が頻出していることが注目されよう（鈴木昭一による現代語訳〔鈴木 1982 : 107〕を参照した）。また当時の「かに」が「虫」の範疇に含まれていたことも確認できる。最後に義満は「よるへなき身ハ今かにと生れきて浪のあはれに志つむはかなさ」と歌を詠んでいる。以上の「御筆跡」（追悼文）は阿弥陀寺に納められ「いまにありといへり」とある〔近藤瓶城編 1983 : 34〕。「いま」というのは1552年とされる物語成立当時のことである。義満の没年は1408年、また将軍在職期間は1368-1394年であり、壇ノ浦の合戦（1185年）のほぼ200年後のことである。『塵塚物語』の刊行はさらにその100数十年後の1552年とされる。成立年がそれで正しければ同年にはすでに「平家かに」なる呼称が使用されていたということになるが、義満の時代にもそうであったかどうかはもちろん不明である。

『塵塚物語』で特に注目したいのは、「かの平家かにを一ツ進上」の部分である。阿弥陀寺（赤間神宮）の授与品あるいは近辺の土産物としての平家蟹の標本は有名であるが、当時すでに「平家かに」なる呼称が使用され、また標本の授与の習慣があったことが推測されよう。

『毛吹草』

管見では、『塵塚物語』に続いて平家蟹が記載されたのは、正保2年（1645）刊行の松江重頼による俳諧作法書『毛吹草』である。同書巻第四は「諸国より出る古今の名物」を国名ごとに列挙している。「長門」は「銀銅」など20品目を挙げながら平家蟹の

記載はない。ところが、「讃岐」については、全8品目の1つが「八島平家蟹（ヤシマニヘイケガニ）」である〔竹内若校訂 2000（1943）：181-182〕。屋島（八島）もまた、早くからの平家蟹の重要な伝承地だということが確認でき、むしろ長門下関よりも有名だったとも考えられる。なお、同書でさらに注目すべきことは、「摂津」の136点の名物を挙げる中に「野里川ニ嶋村蟹」を挙げ、割註には「昔嶋村ト云人此所ニテ合戦シ果ケル其幽霊ト云 カニノ甲ニ人貞〔容貌：筆者注〕スハレリ」と記載している〔同：164〕。ちなみに、「武文蟹」の品目はなく、「尾張」にも「長田蟹」の記載はない。全国を通じ、他に蟹と思われる品目としては、「若狭」の「躑躅」と「摂津」尼崎の「爪白蟹」に限られる。前者はワタリガニ科のガザミの類と考えられる。現在の若狭はズワイガニやベニズワイガニで有名であるが、深海性のこれらが漁獲されるようになったのはずっと後のことである。「爪白蟹」とは現在「ツマジロガニ」と通称され食用されるヒラツメガニ（ワタリガニ科）のことであろうか。しかし、ヒラツメガニは東日本が主産地であり、尼崎名物は爪の白い別種の蟹であったかとも考えられる。

ところで、『毛吹草』は名物を1地域に限定しようとはしていない。例えば「蛤」は「摂津」の名物でもあるが、「伊勢」桑名、「武蔵」川口ほか全国5地域の名物となっている〔同：165-181〕。したがって「長門」に下関の平家蟹が併記されてもよさそうだが、屋島のそれの方が知名度が高かったのだろうか。松江重頼は京都の人である。後の江戸の物書きたちに比べ、讃岐は地理的に近い。試しに、直線距離の比を計算すると、江戸／下関÷江戸／屋島の約1.6に対し、京都／下関÷京都／屋島は約2.6となり、松江重頼にとっては、屋島に比して下関は相対的にはかなりの遠地となる。

『本朝故事因縁集』

著者未詳であるが、1689年（元禄二年）刊行の『本朝故事因縁集』の四十六話はまさに「平家蟹（ヘイケガニ）」と題し「元暦二年三月二十四日平家長門ノ国赤間関ノ合戦ニ討チ負け、水ニ入テ亡シ兵ノ蟹ト為ル。是ヲ平家蟹ト謂フ。評ニ曰、最後ノ一念ニ依テ成仏モ遂ゲ、地獄ニモ墮ベシ。怨念ヲ含ム兵蟹ト為ルモ断ナリ」と記している〔京都大学文学部国語学国文学研究室編 1995：31〕。

『諸国里人談』

寛保3年（1743）成立の『諸国里人談』（菊岡沾涼著）は、「摂津国尼崎兵庫の浦に、蟹の甲怒れる面のごとくにして甲を着たるありさまなり。是秦武文、松浦五郎がために海中に入て死すその霊なりと云り（或島村蟹と云）。○又長門赤間関の辺に、かくのごとくの蟹あり。これは元暦二年に平家の一門戦ひ負て、多く入水しけるその霊なりと云。よつて此処にては平家蟹といへり。両説ともあやしき説なり」と記している〔菊岡沾涼 1743：500〕。

『日本山海名物図会』

宝暦4年（1754年）刊行の『日本山海名物図会』（平瀬徹斎著、長谷川光信挿画）巻

之三には、「讃岐平家蟹 蟹の甲に目鼻口あり。人の面のごとし。俗説に平家の一門讃岐の国八嶋の浦にて源九郎義経にせめほろぼさる、其怨靈かにと成たるとて平家蟹といふ。愚案ずるに此蟹の類諸国にあり。摂州尼崎に武文蟹と云有、秦の武文が怨靈なりと云。又嶋村蟹と云有、豊後、長門には清経蟹と云。皆俗説なり。中華にも鬼蟹とて此かにあり」と記される [平瀬 1754 : 502]。再び、八嶋(屋島)の平家蟹が登場するが、赤間(下関)が言及されていないのも『毛吹草』と同様である。なお、人間よりも大きな蟹の挿絵があるが、ヘイケガニとは似て非なるもので、傍の人間もあまり脅えてはいない様子である。

『斎諧俗談』

『斎諧俗談』は宝暦8年(1758)刊行の大拙東華(だいひとうか)による奇談集である。その巻之五に「鬼蟹」の項があり「たけぶんがに」とルビを振る。「相伝て云。摂州尼崎近所の川水に、不思議の蟹住めりといふ。元弘の乱に、秦の武文といふ人、摂津国兵庫の海に入て死す。其怨靈蟹となる。ゆへに兵庫および播磨国明石の浦の蟹を、俗呼で武文蟹といふ」とあるが [大拙 1758 (1976) : 368-369]、「川水に」というのが野里川の島村蟹同様に気になるところである。海や磯よりも川の方が人の目に付きやすいという事情もあろうか。さて、その武文蟹は「大き尺に近し。蟹^{はさみ}の色赤く、白き紋あり。また享祿四年、細川高国、三好と摂津国にて戦ふ。細川が家臣島村何某といふもの、敵二人を脇挟で、尼が崎の水中に没死す。かるがゆへに尼が崎の浦の小鬼蟹^{こたけぶんがに}を、俗に島村蟹といふ。其大き一二寸ばかり、円くして腹に鬼の面の如き文あり」という [同 : 369]。

武文蟹が大きく尺に近く、島村蟹は一二寸。まさに『和漢三才図会』(1712年)の借用であろう。大拙はさらに平家蟹に触れている。「また讃岐国八島の浦より出る蟹を、平家蟹・長田蟹と名付く。平家の一族没死したる怨靈、蟹となりたと云。また加賀国、越前国より出るものを長田蟹^{おさだかに}と名付くと云。但し長田蟹と号る事、其抛をしらず」という [同 : 同頁]。

登場する蟹の名は「武文蟹」「島村蟹」「平家蟹」「長田蟹」の4名称。「武文蟹」>「島村蟹」までは『和漢三才図会』の受け売りである。「武文蟹」を川の蟹とするのはユニークである。「カプトガニの小さきもの」としない点では『和漢三才図会』との差異が認められるが、漢語で小型のカプトガニを意味する「鬼蟹」に「たけぶんがに」を当てたのは、中途半端な借用といえよう。

『本朝奇跡談』

駒場薬園の長、植村政勝(1657-1777)は、自身による享保五年(1720)から宝暦三年(1753)にかけての採薬の記録を「諸州採薬記」に著わし、安永3年(1774)に『本朝奇跡談』の題名で板行している [板坂耀子 1991 : 440]。同書巻之中「讃岐國屋嶋観音」には「同国屋嶋観音 千手十一面観音。弘法大師の作也。(略)此辺は昔源平の古

戦場なり。此所の海より平家蟹出る。蟹の甲に人の面あり。平家の怨念に依て斯あるなど云。則鬼面蟹（きめんかに）也。此蟹を五六十持参して差上る」と記される〔植村 1774（1991）：240〕。五六十体もの標本がおそらくは比較的容易に集められたのであろう。あるいは、それは土産物として販売されていたのかも知れない。再び、平家蟹の舞台は「屋島」である。また「平家蟹＝鬼面蟹」とあることが興味深い。著者は生物学者であり、かつ五六十もの個体を扱っている筈である。もしも、後の『広辞苑』が記すヘイケガニとキメンガニが混獲されていたならば、両者の形態上の相違を指摘していたかも知れない。

『本草綱目啓蒙』

小野蘭山の『本草綱目啓蒙』（1803年）巻之四十一介之一亀鼈類に「蟹の種類は甚だ多い」とあり、平家蟹等について次のように記している。

平家ガニト呼者アリ。一名シマムラガニ（摂州）、武文ガニ（同上、一説ニ鱈魚〔カブトガニ〕ナリト云）、清常蟹（豊前長門）、治部少輔ガニ（勢州）、ヲサダガニ（加州）、オニガニ、エビスガニ（備前）、摂州、四国、九州ニ皆アリ。小蟹也。甲大サー一寸ニ近シ。東国ニハ大ナル者アリト云。足ハ細クシテ長ト短ト雜リテ常ノ蟹ニ異ナリ。甲ニ眉目口鼻ノ状宛然トシテ怨悪ノ態ニ似タリ
〔小野蘭山 1991：286〕

ここに「平家ガニ＝エビスガニ＝オニガニ＝ヲサダガニ＝清常蟹＝シマムラガニ＝治部少輔ガニ＝武文ガニ（一説にカブトガニ）」という等式が出来上がり、8名称を数えることになる。『大辞典』（1935年）の7名称（和名・学名を除く）を超えているが、「エビスガニ」と「治部少輔ガニ」は「節用集」にも国語辞典にも見られなかった名称である。

なお、『本草綱目啓蒙』は先の「鱈魚（カブトガニ）＝武文蟹」説に対し「本朝食鑑ニ載レドモ、此品摂州ニ産セザレバ、其説穩ナラズ」と記している〔同：287〕。過去のカブトガニの分布を復元できるような研究が現れないものであろうか。

長田蟹の伝承：『尾張方言』『物品識名』

『本草綱目啓蒙』によれば「ヲサダガニ」は加州すなわち加賀の名称であるが、長田忠致・長田景致父子が化成したという伝説に結びつく「長田蟹」であれば、むしろ尾張野間の伝承が強調されそうである。寛政元年（1748）刊行の山本格安による『尾張方言』には、「長田（おさだ）かに 鬼面蟹○撰播云嶋村かに武文かに西土に云清経かに平家かにこれなり」とある〔山本 1748：326〕。

また、文化6年（1809）刊の水谷豊文著『物品識名』は「カニ」の名称として13項を挙げ「ヘイケガニ」の項は「ヘイケガニ ヲサダガニ 鬼面蟹（野記）」とある〔水谷 1809：55〕。ここでは、「へいけがに＝おさだかに＝きめんがに」と結ぶことができる。

『衆鱗図』

続いて江戸時代の図譜類に目を向けてみたい。宝暦年間(1751~1764)に著者不詳で作成されたとされる『高松松平家所蔵 衆鱗図』第三帖は、ヘイケガニ科の蟹の彩色細密画一点を収めているが、そこには「平家蟹 鬼面蟹」と併記された付札が付されている[香川県歴史博物館編 2003:31]。『本朝奇跡談』についても指摘したが、当時は水族の専門家でも「ヘイケガニ」と「キメンガニ」を区別していなかった可能性が高いといえよう。

『千蟲譜』

栗本丹洲著、文化8年(1811)成立とされる『千蟲譜』は最終巻の第十巻に甲殻類の挿絵を収めている。ヘイケガニと思われる2個体が描かれ、そこには「鬼面蟹 タケブンガニ ヘイケガニ シマムラガニ 長門豊前ニテキヨツネガニ (略) 九州海中ニアリ西国ヨリ関東ニハ絶テナシ (略) 尾州ニモ此蟹出ルコトアリオゾサガニ又オサダ蟹トモ云フコレ長田ノ庄司ノ亡靈化スル由ヲ云フ平家ガニトハ唱ヘズ長州文字ケ関海浜ニノミアリト人々思ヘリ左ニ非ズ中国ヨリ西海ニハママルモノナリ」と記している[栗本 1811 (1995):510]。

「へいけがに＝おさだかに(おぞさがに)＝きめんがに＝きよつねがに＝しまむらがに＝たけぶんがに」と同物7名称が挙げられている。わざわざ「平家ガニトハ唱ヘズ」と記しているのは、同物異名をいわんとしているに他ならないと考えられよう。

『燕石雑志』

『燕石雑志』は、文化8年(1811)刊行の滝沢馬琴による随筆である。巻之四の(四)「猿蟹合戦」は猿蟹合戦とその背景にある民間伝承を論じている。馬琴はここで平家蟹等について「我が関西の俗説に、寿永の役に平族多く、長門の赤間及屋島檀浦に没す、その冤魂化して、怪しき蟹になれり。今に至りて背殻、人の面に似たり。眼口分明にして勇士の怒れるが如し。名づけて平家蟹といふ」と記している。下関と屋島の双方で蟹への化成が起こったと述べている部分が注目される。さすがベストセラー作家である。長門、讃岐両方の読者へのサービスだろうか。いや、おそらくは、豊かな情報量からして、一方に限定することをためらったためであろう。

この頃には、長門、讃岐双方が平家蟹伝説の拠点として広く知られていたのである。さらに馬琴は、民間伝承が平行発生したり、あるいは簡単に伝播することを理解していたからかも知れない。類話は、平家に関してだけではない。文章は続く。

摂州大物浦にも又この蟹あり。海人これを武文蟹といふ。又摂州安里河にもこれあり。土人名づけて島村蟹といへり。相伝ふ、正慶二年一宮(尊良親王)の隨身秦武文松浦枝に謀られ御息所を奪ひ去らる。武文これを逐ふて、大物浦に自殺し、冤鬼風濤を発して、主を救ひ遂に化して蟹となる。或はいふ、享祿四年細川高国、三好海雲と戦ふて敗走す。其の臣島村貞則苦戦して主を救ひ、遂に安里川に没して、化して蟹になるといへり。其の実は一種也。唐山にこれを関公蟹といふ。

[滝沢 1811 (1975):443-444]

馬琴の解釈では「平家蟹＝武文蟹＝島村蟹＝（中国語の）関公蟹」となる。伊藤大吾・伊藤剛史によれば、「中国では今、ヘイケガニの仲間の標準中国名を、三国志の英雄の名から、関公蟹そして関羽蟹といい、ヘイケガニは日本関羽（関公）蟹」と呼ばれているという [伊藤&伊藤 2006 : 15]。

『水産小学』と『水産図解』

『水産小学』は河原田盛美により、1883から1885年頃に成立した水族図譜である。北斎漫画を連想させるタッチの挿絵が並ぶが、ヘイケガニ科と考えられる挿絵は残念ながらない。上巻で「甲殻類」の名称を列挙するが、そこには「鬼面鱗」と「島村蟹」の名が挙がり、間に「いばらかに」など別の蟹の名が挿入されているので [河原田 (1995) : 188]、両者を別種とする考えが読み取れる。

『水産図解』は藤川三溪著、刊行年不明だが、著者は私立大日本水産学校校長を務め、別に『捕鯨図識』（1889年刊）の著作があるので、19世紀末頃の成立と推測される [同編者解題 : 1412]。「平家蟹ヘイケガニ 讃岐國三木郡壇ノ浦ニ出ツ相伝フ往昔平氏ノ軍敗レテ公子王孫死シ蟹トナルト大サー二寸ノモノ多シ間一尺ニ及フモノアリト云」と記され、かなりデフォルメされた平家蟹の挿絵を添えている [藤川 (1995) : 101]。

『尾張名所図会』

再び長田蟹の情報を見てみよう。岡田啓・野口道直編により明治13年（1880）に出版された『尾張名所図会』は大御堂寺と長田父子に関する伝説を詳述した後、「長田蟹」の見出しのもと次のように綴っている。

長田蟹 野間の海濱に生ず。甲に人面の如き紋あり。これを長田忠致、頼朝公に誅せられし時の怨魂、化して蟹となれりと、里人専らいひ傳ふ。しかれども蟹譜にはゆる虎蟹にして、摂州にて島村蟹といひ、西海にて武文蟹というふもの、みな此長田蟹と一種にしてもとよりある物なれど、天長田が非道を疾み、人口をかりて、後世に其悪名を傳へしむるものならん。恐るべし、つつしむべし。 [岡田・野口 1880 (1970) : 96]

ここでは、「おさだかに＝しまむらがに＝たけぶんがに」と結ぶことができる。『本草綱目啓蒙』や『尾張方言』は「へいけがに」をこれに結びつけていたが、有名な「へいけがに」がなぜ欠落しているのだろうか。もしかすると、「へいけがに」の姿形はすでに土産物等で有名になり、著者らの知る「おさだかに」がそれとは種類を異にしていたからか。そんな推測が許されるかも知れない。

以上、平家蟹をはじめ、人間が再生・化成したとされる伝承について、国語辞典、その他の文献における記載の仕方を概観してきた。おおよそ、時系列に沿って進めてきたが、割愛もあれば見落としも多かろう。紙幅と能力の都合で中途半端な部分であるが、蟹に因んでこの辺で自切することにした。次稿では20世紀以降の文献と、それ以前

の資料で今回割愛あるいは見落とししたものを取り上げ、せめて冒頭で記した3課題中の第一の課題、すなわち、同定、比定の問題を再整理し、その背景についてさらに論じてみたい。

謝辞

この研究に際しては、下関市立しものせき水族館魚類展示課長の土井啓行学芸員、同じく玉井健太学芸員、方言学に関しては鏡味明克先生、また筆者の職場の同僚である神山重彦氏、河野敏宏氏、多門靖容氏にそれぞれの専門に関するご助言をいただいた。その成果がまだ十分反映されていないことをお詫びしつつ、ご協力を深く感謝申し上げたい。

引用文献（〔表1〕に示した辞典類を除く）

- 浅井了意 1692 (1983) 『狗張子』（朝倉治彦編 1983 『仮名草子集成』第4巻 東京堂出版）
- 栗本丹洲 1811 『千蟲譜』（浅見恵・安田健訳注 1995 『江戸科学古典叢書』41 恒和出版）
- 伊藤大吾・伊藤剛史 2006 「カプトガニの異名、地方名の由来について」『かぶとがに』26号 日本カプトガニを守る会 pp.8-27
- 伊藤富夫 1991 「瀬戸内海のカプトガニ」『かぶとがに』11号 日本カプトガニを守る会 pp.16-17
- 植村政勝 1774 『本朝奇跡談』板坂耀子校訂 1991 『近世紀行集成 叢書江戸文庫』17 国書刊行会 pp.49-90
- 岡田啓・野口道直 1880 (1970) 『尾張名所図会』第6巻（愛知県郷土資料刊行会編集 1970 『尾張名所図会』中巻 愛知県郷土資料刊行会発行）
- 岡田溪志 1969 (1698-1701) 『摂陽群談』下 歴史図書社
- 香川県歴史博物館編 2003 『高松松平家所蔵 衆鱗図』第三帖 香川県歴史博物館友の会博物図譜刊行会
- 河原田盛美著 1883-1885頃 『水産小学』上（浅見恵・安田健訳編 1995 『日本産業史資料』5 科学書院）
- 京都大学文学部国語学国文学研究室編 1973 『諸国方言物類称呼 本文・釈文・索引』京都大学国文学会
- 菊岡沾涼 1743 『諸国里人談』（日本随筆大成編集部 1975 『日本随筆大成』第2期24巻 日本随筆大成編集部 吉川弘文館）
- 酒井恒 1980 『蟹：その生態の神秘』講談社
- 島田勇雄訳注 1981 『本朝食鑑』5 平凡社 東洋文庫
- 島田勇雄・竹島淳夫・樋口元巳訳注 1987 『和漢三才図会』7 平凡社 東洋文庫
- 鈴木昭一訳 1982 『塵塚物語』教育社 教育社新書
- 大拙東華 1758 『斎諧俗談』（日本随筆大成編集部編 1976 『日本随筆大成』第1期19巻 吉川弘文館）
- 滝沢馬琴 1811 『燕石雑志』（日本随筆大成編集部編 1975 『日本随筆大成』第2期19巻 吉川弘文館）
- 寺島良安 1715 (正徳5年) 『倭漢三才圖會』巻第45, 46 大野木市兵衛 (大阪) 愛知学院

- 大学図書館情報センター所蔵本
- 中田祝夫・小林祥次郎著 2006 『改訂新版書言字考節用集研究並びに索引』 勉誠出版
- 平瀬徹斎著, 長谷川光信挿画 1754 『日本山海名物図会』 (浅見恵・安田健訳編 1992 『近世歴史資料集成』第2期第1巻 『日本産業史資料』1 科学書院)
- 藤川三溪 19世紀末頃 『水産図解』 (浅見恵, 安田健訳編 1995 『近世歴史資料集成』第2期第5巻 『日本産業史資料』5 科学書院)
- 水谷豊文 1809 「物品識名」 名古屋市蓬左文庫編 1982 『名古屋叢書三編』第19巻 名古屋市教育委員会
- 南方熊楠 1913 (1973) 「平家蟹の話」 『南方熊楠全集』第6巻 平凡社 pp.47-60
- 山本格安 1748 『尾張方言』 (福井久蔵編 1965 『国語学大系 方言一』 白帝社 pp.313-326)
- 矢野宗幹他校註 1983 『大和本草』第2冊 矢野宗幹他校註 有明書房
- 著者不詳 『塵塚物語』 近藤瓶城編 1983 『改定史籍集覧』第10冊 臨川書店
- 著者不詳 1689 『本朝故事因縁集』 (京都大学文学部国語学国文学研究室編 1995 『京都大学蔵大惣本稀書集成』第8巻 臨川書店)